

とある雑魚転生者の日
記録

E K A W A R I

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはチート皆無通りこして、原作知識以外の特典一切無し的一般人転生を果たした雑魚凡人、元オタクな男子高生の『大風コナタ』の物語である。

アカデミーでもぶっちぎりの落ち零れである彼の目標は「出来れば死にたくない。あと死ぬまでに女の子の生乳揉みたい」というもの。そんな巨乳マニアで雑魚モブおっぱい星人である主人公コナタのNARUTO世界で育ったお話。

目次

- とある雑魚転生者の日記録 — 1
- 2 周目の世界にしておっぱい女神に出会
いました(※同作者による別作品「楽園は
消えた」とのオリ主同士の邂逅クロスネ
タ) — 22

とある雑魚転生者の日記録

ボクの名前は大風コナタ。

漸く文字を習いだったので、今日から日記をつけようと思う。

しかし何から書けばいいのだろうか。よく考えたら日記とか殆ど書いたことない。

わからないのでとりあえずボク自身と今の境遇のことについて書こうと思う。

とりあえず年齢は……世間的には4歳くらいだが、精神年齢は多分20歳越えているオッサンである。え？20歳ってまだ若いんじゃないかって？ いやいや高校生から見たら充分オッサンだよ。

因みに大風コナタというのはこの世界でのボクの名前なのだが、実はボクは別の名前の人物として1人の人間の人生丸ごと一個分の記憶がある。

はい、そこ妄想乙とか病院行けとかいうなよ、なんでかはつきりあるもんは仕方ないし、本当にあれがただの妄想で夢だとしたら、この語彙がやけに豊かな不気味な4歳児って一体なに？ って話なんだからな。

って、ボクは一体誰にツツコミをしているんだろう。ヤベ、1人ツツコミとか虚しく

なってきた。

とりあえず、話を戻そう。

ともかく別人の記憶があつたわけであり、ボクが思うにそれはボクの前世か何かかなのだと思う。

その世界……まあ地球の日本と呼ばれていた場所なんだが、そこでボクは普通の男子高生で、漫画やゲームやアニメが大好きなまあ、オタクという奴だった。とはいっても、親父がキャンプとバーベキュー好きだったせいで、オタクのわりには日焼けとかしてて案外アウトドアでもあつたから、引きこもりじゃなかつたけどね。

だけどそんなある日の16歳の夏。家族全員で海水浴へと出かけた其の日、その世界のボクは死んだ。

まあ、あれだ、海の中潜って出ようとしたとき足つってうっかり溺死しちゃったんだよ……ていうか泳ぎは体育の中ではわりと得意なほうだと自負してたからシヨックだったよ。溺れるボクを見ても家族の誰もボクがマジで溺れているなんてちつとも気づかなかつたしよ。

……実際は言うほど軽くもなかつたけどね。なにせ当時ボクはまだ16歳だったわけで、まだまだしたいこともやりたいこともたくさんあつたし。見たいアニメとか続きが気になる漫画とかあつたし、やりたいゲームもあつたし、予約してたゲームもあつた

のになあ……あと1度でいいから女の子の生乳触りたかった……あとあわよくば揉み
たかった。ていうか女の子と付き合いたかった。

で、そんな未練たらたらで死んだと思つたら……なんか赤ん坊ですよ。赤ん坊になっ
ちやつてますよ。もう意味わかりませんよ。

赤ん坊だからか生まれたてだからかなのか、よく目は見えないんだけどさ、知らない
オッサンと姉ちゃんの声が「コナタ、お父さんだよ」「お母さんよー」とか語りかけてく
るもんだからもうわけわからないね。ボク死んだんじやなかったのかよ、と全力でツツ
コミしたね。

ついでに赤ん坊だからか長時間自意識保っているのも難しくて、その頃ボクの意識が
表面上に上がることなんて1日1時間がせいぜいだったし、赤子で喉が発達していないか
らか言葉をしゃべれるようになるのも1年かかったし、体もやっぱり普通の赤子ばりに
中々動かなかつた。

……いや、それ自体はいいんだけどね。生まれたてで動いたり話したり出来る赤子な
んで不気味すぎて売り飛ばされるか捨てられるのが落ちだし、意識がぼーとするから粗
相しても羞恥心を思つたより覚えず済んだし。あと母ちゃんのおっぱいは柔らかかかっ
た……！ 思つたより母乳は美味くなかつたけど。調子にのつてチュパチュパしまく
るエロガキですまん母ちゃん。

あれ？ ボク赤子ライフ楽しんでる、ひよつとして？

それでもそうして3年も経てば周囲の状況から赤子なりに知ること多いわけで……そこでボクはとんでもないことに気付いた。

ここ……火の国にある木の葉の里ですやん？ ていうか父ちゃんしがないう里の中忍ですやん？ ていうか34歳にもなって中忍なってまだ5年目って色々ヤバくね？
うちの父ちゃん。じゃなくて、問題は其処じゃなくて、火の国だのチャクラだのどう考えたって、ここ漫画「NARUTO」の世界じゃねえかー!!

ていうか、え？ もう本当これどういうこと？ マジどういうこと？ なんでボクがNARUTO世界に？ え？ 何これ転生？ これが巷で噂の転生なの。ていうか、確かにあの時僅か16で死ぬのに未練はあったけど、NARUTO世界に転生してえなんて願望なかったよ、マジどうなってんだよ。

だってNARUTO世界とかあーた危険ですじやん。ボクみたいな一般人お陀仏なりかねないじゃん？ どうせ転生するならもつと安全な世界でハーレム転生うはうはとかしたかったっての！ なんだよ、しかもこの顔面平均値並まっただ中の顔。なんでどうせ転生するならイケメンとかになつてないんだよ、畜生。いや、それでも前世のボクよりはマシな顔かもしれないけどね？ でもこの普通ぶりはヤバイよ、モブに混ざれる。

しかも、あれだよ……九尾襲撃が2年前ってことはあれ？　ボク、ネジヤリーの同期ってこと？　マジかよ、もう本当勘弁してよ。どうしろってんだよ。ていうかナルトの知識なんて52巻か53巻くらいまでの知識しかないよ。それも真面目に読んでたわけじゃないからあらすじと大体の登場キャラは知ってても詳細なんて覚えてないよ。どうしろってのさ。

でもまあ、なるようにしかないなあ。とりあえず生存確立上げるために少しでも鍛えとこう……。あとナルトがぼっちなのは可哀想だから見かけたら優しくしとこ……。そんな風に思ったのが去年の話である。

正直、これからもうどうしていいのかわらかないし、まだ4歳というわけで両親にはブリッ子してお願いしても、忍術の修行もなんもやらせてくれないし、独学じゃチャクラがどうのこうのとか理屈がサツパリわからないので独学で修行すら無理だけど、これから頑張ろうと思う。

ボク自身のために。

* * *

えーと、随分久しぶりに日記を付けるような気がする。あなたの街のアイドル(大嘘)

大風コナタです。

ボクも今年で6歳になり、アカデミーに無事入学しました。ていうか数年ぶりの日記とか既にこれ日記じゃないよね、うん。とかそんな感想は置いときまして、アカデミーに入学してから知ったことですが……ボク、普通に落ちこぼれです。

やばい、先生が言ってることがサツパリわからない。ていうか、チャクラってマジ何!?! うおお、吃驚するくらいわからない。甘かった! 学校入ればわかるようになるだろ、とか原作知識あるから楽勝とか甘かった! ちつとも楽勝じゃねえ。ていうか、先生の話聞いてるとわけわからなすぎて眠いんだよ、寝ちやうんだよ、わかる!?

おまけに運動能力もあれですよ、後から数えたほうが早いですよ。

なんだよ、ボク雑魚過ぎんじゃねえかよ。ただでさえチャクラ使って何かしたり出来ないのに、運動神経にも恵まれず、座学もさっぱりってどうよ、いやマジでどうよ。ていうか、得意なものなさすぎだろ、うおおお、どうしよう、どうしたらいいんだ!?

そんなことを思いつつ頭を抱えていたら、隣の子にそっとハンカチを出されました。

一瞬隣の子が天使に見えましたボクですが、だがしかし、その直後のやりとりにボクは更に傷ついた!

「あ、ありがとう」

「いえ……その、頑張つて?」

……隣の子は生暖かい同情に満ちた目をしていました。可哀想な子を見る目そのものだよ、畜生。くそ、乳揉むぞ。いや、揉むほどねえけど。ていうか、よく見るとこの子テンテンじゃね？

そんな感じでボクは今日も元気？ に生きてます。

* * *

えーと、またも久しぶりの日記だな。ていうかこれ本当に日記なのかな？ まあ、いや。書いたことないからよくわからないけど、日記だとボクが思えば日記なのです。

さて、気を取り直して……ボクも今年で7歳になったわけですが、なんと先日ナルトと知り合いました。公園でポツーンとしていたので、遊びに誘ったら嬉しそうな顔をして懐いてきた感じであります。ふ、ちよろいぜ。

因みに前世でオタクしてた時代ボクはナルトのことが特別好きだったわけではなく、好きなのは我愛羅とか白とか多由也とかだったんだけど、まああれだな……ナルトの境遇は可哀想だなーと思ってたので、改善してやれるもんなら改善してやりたいなーと思っていたわけですな、はい。といつても原作イベント巻き込まれるほど仲良くなりたーいとは思わないし、原作イベントに首突っ込む気もないけど。ていうか、それしたらボ

ク死ぬし。

あれだ、イルカ先生と似たようなボジで生き残れたらいいんだ、うん。イルカ先生って何気にあまり危険な目にあわないしな。

因みにサスケとは関わりたくないっす。だってナルトは仲良くなっても主人公補生の恩恵で生き残れそうな気がするけど、サスケに関わったら死にそうじゃん、ボクが。正直サスケのために死ぬほどサスケに思い入れないし、やつぱ自分が生き残るのが一番だよ。願わくば無事に生き残って可愛い嫁さん貰って大往生したいです。いや、可愛くなくてもいいからおっぱいおつきい嫁さんが欲しいです。

……うん、女の子のおっぱいをこの手で合法的に揉む日まで死ぬに死ねないよね。

そんなことを思う今日この頃。

* * *

どうも、半年ぶりの日記になるかなあとか思う大風コナタです。

最近漸くチャクラの使い方を覚えて、少しずつ忍術を覚えられるようになりましたボクであります。

しかし、変化の術ってアカデミーの術のわりに覚えるの案外難しくね？ 難易度あれ

高くね？ 変化したい対象の姿を詳細にイメージ出来なかったら無理なんすけど、なんでもみな簡単にできるのかわかりません。洞察力？ 洞察力が忍者には大事だつての？ いや、そりや大事なんだろうけど、ボクみたいなしがない一般人としてはもう勘弁してよつてくらいアカデミーの授業はいつもいっぱいいっぱいです。

さて、そんなボクですが、ナルトと大分仲良くなったので、昨日ナルトを家に招きましたのでその時の話をしようと思います。

まあ、ナルトといえればあれだよ、孤児なわけで当然飯もいつも一人で食ってるわけです。だから事前に母ちゃんに「友達夕食に誘っていい？」と許可取った上でナルトに「うちに飯食いに来いよ」と誘って連れてきたわけですが……里人のナルトへの悪感情っぷりをうっかり忘れてたボクが悪いのか、いつもは優しくもしいがない万年下っ端中忍の父ちゃんは、あれだ、ナルトへの敵意バリバリなものでした。ちーん。

って、チーンじゃねえ！

いや、なんだよ、父ちゃん、その汚物見る目は。ボクの友達っていつて紹介したのに失礼じゃね？ まあ、これ超失礼じゃね？ 失礼過ぎるよな。

「あ……あの、オレさ、コナタの友達のうちまきナルト……」

「……………」

ナルトが怖じ気づきながらも頑張つて自己紹介したつてのにガン無視つてどうよ!?

あんた、いくつだ、ガキか。

いや、確かにナルトは九尾の人柱力ですよ。父ちゃんの友達も九尾との戦いで死んだって母ちゃんにも聞いてましたよ。でもさ、それってナルトのせいかな？ ナルトのせいじゃないじゃん。九尾封印されただけでナルト自身があんたに何かしたのかってーの！ で、あんまりムカついたので、後ろ振り向いたクソオヤジの膝に蹴りつけてボクは言つてやりました。

「父ちゃん、ナルトはボクの親友だよ。まさか父ちゃんは息子の親友を馬鹿にしたりしないよね？ そんな大人気ないことしないよね？ しないよなあ？ ああん？」

……ガラ悪くてすまぬ。でもマジでむかついたんだよ。

大体ナルトが九尾の人柱力なのは口外禁止だし、ナルトは九尾を封印して死んだ四代目の息子だつてのにこの里人からナルトへの扱いには前から腹据えかねてたんだ。

「しかし、コナタ、お前は知らんかもしれないがその小僧は……」

「ナルトはナルトだ。ボクの親友で、一つ年下の可愛い弟分。で、もう1度聞くけど父ちゃん、ボクの『友達』がなんだって？」

そういうと父ちゃんは口をもごもごしながら奥に引つ込みました。ふ、ちよろいぜ。流石万年下つ端、強く言われるのに弱いな……ていうか、相変わらずよくそれで中忍になれたな。奇跡じゃね？ 因みにその時、ナルトはボクの『親友』連呼に目を潤ませど

うやら感動していたようです。ふ、惚れてくれてもいいんだよ？　ただし、おいろけの術の女体変化版限定でお願いします。あ、おっぱい揉みてえ……。

因みに母ちゃんは元々おっとりしている人だからなのか、ナルトを「友達」と紹介しても「あらあら、ナルトくん、うちのコナタをよろしくね」とのほほんというだけで特に何か反発したりとかはなかったです。

まあ、そんな感じでアカデミーでは相変わらず万年落ち零れですが、ボクはボクなりに楽しくやってます。

* * *

どうも何年ぶりの日記かわからないけど、12歳になりました、コナタです。まず、事件です。なんと　ボク……アカデミー卒業試験に落ちました。

いや、元々落ち零れだって自覚はあったけど、それでもショックだよ……。

しかも2回目の奴で合格したのはいいけど、そこで合格したら合格したで、先生が決めた班で上忍の先生のところに行って試験あるじゃん？　ほら原作でもナルトがやっていた鈴取り合戦。ボクの場合はカカシ先生じゃないから鈴取り合戦じゃなかったけどさ、普通に落ちたよ。ボクの班全員アカデミー出戻りで送り返されちゃったヨ。もう1

度アカデミーやり直せだつて……畜生。マジで落ちるとは思つてなかつたよ。

そりやね？ 劣等生だつて自覚はありましたよ？ でもさ、下忍にすらなれないとかどうよ。父ちゃん未だに中忍かあ……と馬鹿にしたたボクの立場ないよ。なんだよ忍たまから下忍の壁も厚いじゃん。分厚すぎるじゃん。クソ、キバとかナルトの同期で役立たずとかへつぽことか前世では思つてたボクだけど、今のボクの目から見たらキバあたりも才能がありすぎてなんつうか憎い！ なんだよ、超天才ばつかで相対的にへつぽこに見えるだけであいつ天才じゃん。普通に天才じゃん。うおおおん、酷いよ、あんまりだよ、神様は不公平だよ畜生。

と、そんな感じで公園で落ち込んでいたら、そんなボクを見かねてかナルトがちよこちよこやつてきて、「コナタ、元気出すつてばよ、な？」とか言いながら一生懸命慰めてきました。他にも一発芸とかしておどけたりとか道化まで演じちゃつて、まあ……なんていうかナルトの優しさが身に染みした。

「ナルト、お前良い奴だなあ……」

「そ、そうか？」

ちよつとお兄ちゃん、感動しちまつたよ。

だが、しかしボクはそこで落ち込みついでにナルトにあるお願い事をするこゝろにした。

「なあ、マイブラザー。お願い事があるんだが聞いてくれないか？ 多分それしたら元気になると思うから」

「なんだってばよ?」

不思議そうに見返しながらも、ボクが元気になるという言葉聞いてか、やや真剣みを帯びた顔でボクを見返すナルトに対しボクはこう言った。

「あれあるだろ。お前の得意忍術のおいろけの術。それで今すぐ女体変化してくれないか?」

「なんでだってば?」

「いいから」

そういうと「変化!」と印を結ぶと同時に、ナルトの姿は煙にかき消え、代わりにようにプロポーションが抜群なナルトによく似た顔立ちの素っ裸の美少女が煙の中から現れた。

その美少女が呑気な口調で言う。

「おーい、コナタ、オマエがいうからなっただけど、これで良かった……みぎやああ」

そしてボクは、少女姿のナルトが何かいうより前にその本能の俣に指をまるやかな胸に沿わして、感情の赴くまま揉みしだいた。

「……ちよ、コナタツ、お落ち着くってばよ! ひゃ、やめろってば」

焦った声でナルトが何か言ってるようだがもう耳には入っていない。ただ本能のままにその適度にかい胸を揉んで揉んで揉みまくるだけだ！

ああ。おっぱいだ、おっぱい様がここにいる。ヘヴンはここにあったのだ。柔らかい。まるで手にしつとりと纏わり付くようだ。この揉み心地溜まりません。女の子の生乳を揉みしだく、この日をどれだけ夢見たことか。本物はどれくらい柔らかく素晴らしいんだろうと、赤ん坊の時おっぱいを吸う時触った母ちゃんの胸を参考に妄想するだけの日々だった。

だがしかし、いくら可愛い女の子の姿をしよう、この正体はナルトおとこなわけで、それを考えたなら『いつか女の子の生乳を揉んでやる』という目的を達成しているとは言い難いんだよな。所詮これは変化の術でナルトが化けただけの紛い物の女体なわけだし。

だが、しかしこれも何時の日かのための予行演習というやつだよな。うん。きつとそう。とりあえずおっぱいが柔らかければそれは正義だ！

とりあえずそんなことを女体変化したナルトの胸を揉みしだきながら考えていると、ボンツと音がしてナルトが元の姿に戻った。チツ、贗作とはいえもう少し味わっていたかったというのに。

だが、まあいい。予行演習は完璧だ。何時の日か、本物の女子を、次こそ本物の女子の乳を揉んでやる。それまでボクは死ねない！

そう決意を固め、ガッツポーズを取りながらボクは熱くこの空に向かって叫んだ。

「おっぱいには夢が詰まっている！ おっぱいこそ正義!!」

「コナタ、オレたまにお前のことがよくわからないってば……」

む、ボクのこの高尚な願いがわからぬとは尻の青い奴め。って、そういえばナルトはサクラが好きだったつげな。あの貧乳のサクラが。ならば、この熱い胸の鼓動がわからなくても当然か。しかし、あの貧乳の何がいいのだろう。Cカップ以下の胸など男の胸と大差ねえじゃねえか。やはり女は巨乳に限る。おっぱいこそロマン！ おっぱいこそ正義！ だが何もいうまい、ナルトはお子様なだけなものな。大丈夫、きつとお前もいつかお胸様の良さがわかるようになるよ。

「ナルト、サンキュウ。お前のおかげで元気になった。あれほどリアルな感触の女体に変化出来るとは流石はナルト！ お前は天才だよ。というわけで今日も元気におっぱい万歳！」

「褒めてくれたのは嬉しいけど、やっぱオレにはわからないってばよ……」
なんだかナルトがげんなりした声をしていた気がするが、気にすることはやめにする。

大丈夫、この熱い情熱がある限り、たとえ最底辺のモブでしかなかろうと、自分で言うのも悲しいくらい雑魚であろうと、一寸の虫にも五分の魂、ボクはきつと生きていけ

るさ。

そしていつか、次こそは本物の女の子の生乳を揉んでみせる！

* * *

どうも13歳になりました、大風コナタです。

実はあれからどうせ才能のない忍者への道は諦めてアカデミーを退学し、木の葉の一楽ラーメン店で働くことになりました。

……まあ、よく考えたら忍びになるよりも、ラーメン店の店員のほうが死ぬ確率低いよね。うん。なんで今まで考えつかなかったんだろうね？　なんかNARUTO世界に生まれたからには忍者にならないと駄目な気がしてたよ。

「だあああ！　遅い！　もつと早く皿洗いすませねえか！」

「へい、親方すみません！」

まあ……未だ雑用係兼皿洗いなんですけどね。

と、そんなこんなでいつも通りの其の日、ナルトがまた一楽ラーメンへとやってきました。

「おっちゃん、豚骨ラーメン一つー！　あ、コナタ、久しぶりだつてばよ」

因みに雑用係であるボクはお使いなどにまわされることが多いから、ナルトとの遭遇は一楽勤めに関わらず週1くらいだったたりする。なので苦笑しながら言った。

「先週会つただろ」

「そうだけどさ……あ、見てくれれば、これ」

そういつて、ナルトが示したのはいつもつけていたゴーグルではなく、木の葉の額宛だった。

そうナルトは原作通り、3回卒業試験に落ちながら、先日ミズキ先生事件後にアカデミー卒業試験に合格したのだ。

「お、卒業出来たのか、おめでとう。やっぱナルトはすげーよ」

「へへっ、オレつてば将来火影になる男だからな」

そういつてナルトは得意そうに笑った。

「ま、本当に大変なのはこれからだし頑張れ！ それとボクからの合格祝いだ、今日は奢るよ。おやつさん、ナルトの今日食べる分ボクの給料からさっぴいといてくださーい！」

「いいのかわ？」

「遠慮するなよ、友達だろ。お祝いくらいさせろーてエの」

そういつて笑つたら、ナルトもつられて嬉しそうに笑った。

それから親方に「今日はもう上がっていい」と言われたのもあり、ボクはナルトと互いに近況報告をしながら楽しく話合い笑い合った。

「じゃあな、ナルト、またな」

そう声をかけ別れる。もう夜更けだ。少し話しすぎた。そんなことを思いながらボクはつたない灯りを頼りに拙い日記もどきをメモ帳に走り書きさせる。

「ふう」

息をつき肩をまわせればバキバキと音がなつて苦笑する。元々運動神経は微妙だったけど、それでもアカデミー時代は忍びを目指す以上、体力作りや運動は欠かせないものだったので肩が凝るなんてなかったのに、一楽に勤めだしてからすっかりなまってしまった。13歳でこれってちよつと問題があると思う。

そんなことを思いながら、ボクは里の外れを散歩した。

今日は良い月夜で夜風が気持ちよかった。気分もよくて、またなんだかんだいってこの13年間本当に危険な目にあつたことなんてなくて、だから忘れていたのかも知れない。

この世界が如何に物騒な世界であるかについて。

「ええ？」

最初に感じたのは痛みとすら認識出来なかった痛み。突如グラリと傾き、視界いっぱい目に映った地面。

そして聞き覚えのある男の声。

「駄目だよ、こんな夜中に里の外れを一人で出歩いちゃ」

ああ、そうだこの声は……薬師カブト。

優しげにさえ聞こえる声でそうカブトラしき男が言う。もう体は動かない。目も腕も足も動かない。何をされたかささえわからない。

「運が良い。丁度10代前半くらいの男の死体が不足してたんだ」

その言葉を最期にボクの意識は完全に切れた。

そして暗闇へと落ちる。

死んだのか、ボクは。

こんなところで、まだなにもしていないなかったのに、また、死んだのか。

いつか人間は死ぬものだとはわかっていた。簡単に人間死ぬ時は死ぬんだと、前世の経験からわかっていたはずだった。

だけど、嗚呼、最期に母ちゃんでもない、女体変化ナルトでもない、本物の女の子のおっぱい、揉みたかったなあ……。

……。

……。

……ん？

あれ？　なんで死んだのに意識が分離したりしないんだろう？　おかしいなあ。

やがて眩しいくらいの光が現れた。なにこれ目を開けてられない？

あれ？　目を開けるってなんだ？　ボク死んだんじやなかったの？

ていうか、あれ？　この状況、なんかデジャビユ。

そんなことを思っていると聞き覚えのある男と女の声が耳に届いた。

「あ、アナタ目が覚めたわ」

「何々どれどれ？」

そういつて『ボク』の顔を覗き込んでくる男女。ただしその顔は視界が悪いのかよくわからなかったが、それでもその声だけでボクはその2人が誰かわかってしまった。

いやいや、これってまさか……!?

「コナタ、お父さんだよ」

「お母さんよー」

……すみません、チエンジでいいですか？

終わり。

2周目の世界にしておっぱい女神に出会いました（※同作者による別作品「楽園は消えた」とのオリ主同士の邂逅クロスネタ）

やあ、はじめましての方もそうでないかたも元気？ ボクの名前は大風コナタ、今日も元気に生きているモブ中のモブでぶっちぎりの落ち零れな雑魚忍たまです。

……自分で言っていて悲しくなってきた。

そんなボクですが、日本の男子高生から生まれ変わり何故かNARUTO世界に生まれ変わったと思ったら13歳で人生退場、ああ、女の子の生乳揉みたかったなあと未練を残しつつも死んだと思ったら、再び「大風コナタ」の人生2周目、やり直し中なのですよー、ちなみに今で2周目コナタ6歳です。

……自分でいうのもなんだけどわけわからないね、こんなモブ中のモブの雑魚を2回もやるくらいなら未練はあってもあのまま死んでたほうがマシだったの。とは思いうけど、どうせ2周目なんだし、またなったからには仕方ないので開き直ってボクはボ

クなりに楽しんで、人生前向きに生きていくつもりだけどね。

そんなことを思つて過ごしていたボクなのですが、本日目の前に、確かあるえ？ 前回ではこんな人いなくなかつたつけ？ と言いたくなるほど見覚えのない人にアカデミーにて遭遇してしまいました。

そう、おっぱい女神が、なんかおっぱい女神がいる。(動揺中)

何あれ？ 身長150cmあるのかないのかつてくらい小柄なのにおつきい。あんま露出度高くないのに服の上からわかるくらいたゆんたゆんでポインポイン。ウエストはわりとキュツとしているのに尻もおつきい。腕とか細くて全体的にパーツがちっちゃいのに肉付きがなんか出るとこ出ててムチムチ。

なんとというおっぱいボリュームだ、けしからん、素晴らしい。これ絶対少なくともEかFカップはあるよ。

思わずその素晴らしいお胸様を前に、ボクは見惚れてしまった。

「おい……えーと、君大丈夫か？」

なんかおっぱい女神が言つてる。プルンと胸が揺れながらボクに向かって近づいてくる。ああ、あれに胸を埋めたら一体どんな心地がするのだろう。うへへ……なんてことを思つてたら慌てた声で何事か女神が突然叫びだした。

「うわあ!? ちょっと君、その鼻血、大丈夫か!? 凄い量だぞ」

「へ？」

あれ、おっぱい女神、可愛い顔して意外とボーイッシュなしゃべり方なんですわねと
思ってたたら、女神が言い出したのはそんな言葉で、ボクは思わず目線を下へと落とした。

ああ、本当だ。鼻血ボタボタ垂れまくってる、気付かなかった。

案外にも呑気にそんなことを思っていると、おっぱい女神はなにか塵紙らしきものを
取り出して、それで優しくボクの顔を拭いっつ、鼻血の止まらないボクの鼻をそつと押
さえて言った。

「ほら、自分でもちゃんと押さえて。しかしこんなに出て大丈夫なのか？ 貧血とかに
はなつてないよな？ 気をつけないと駄目だよ。とりあえず教室まで送るから学年と
名前を覚えてくれないかな」

ボクに視線を合わせるため屈み込みながらそんな言葉をいうその人の顔は真剣で、か
つ童顔で可愛いらしい顔をしていた。って、魅惑のおっぱいだけでなく可愛くて優しい
とかあんたが天使か、惚れるぞ、こんにやろう。

てか、おっぱい！ すぐ側にあるおっぱいデカイ、デカイ。身近で見るとよりデカイ
よ！ 体格ちっちゃいのおっぱいデカイよ、うわい。

と、思ってたらどこかからボールが飛んできて、それを避けるためか彼女はボクを抱
えて横に飛んだ。その際に胸の谷間におもいつき顔がゴールインして、その感触のあ

まりのリアルさにボクは再び鼻血を噴き出してしまった。

ぶはあ、何コレ！ 超、柔らかい！ フヨフヨのムニヨムニヨ！ やばい、お胸様に埋もれて窒息死すりゆ。ふふ、もういつ死んでもいい……天国や、天国はここにあったんや、がくり。

「コラッ、こんなところまで飛ばして。私はいいけど、小さい子に当たったら問題なんだからな。今度から気をつけないと駄目だぞ。ほら、ボール」

「えへへ、シスイ先生。すみません」

「ところで先生、その子大丈夫？　なんか恍惚とした顔で鼻血吹いて気絶してんだけど」「ん？　うわあああ、大丈夫かー!?!」

なんて声が聞こえたような気はするがあとはもう暗転した。

* * *

目が覚めると、自分ちの布団の中でした。

「ふ、夢か」

そりやそうだよな、あんな素晴らしいお胸様がボクなんか縁あるわけないもんな。

可愛くて小柄で優しい巨乳っ子なんてそれこそお伽話の中だけにしかないって。

いや、すっかり夢にしてはやけにリアルな感触だったな。ふわふわのむにゅむにゅで、まるでつきたての餅みたいな感触だった……やべ、思い出したら再び鼻血出そう。

そんなことを思いながら台所にボクは向かった。そして、そこでボクは、あの出来事が夢ではなかったことを知るのであった！

「ふふふ、先生すみません。うちの息子が世話になっただけではなくこんなことまで」「いえいえ、たいしたことじゃないですから」

「あ、コナタ、良かった、目が覚めたのね？」

なんだか母ちゃんと仲良さそうにニコニコ談笑しているあそこにおわす方は、おっぱい女神ではないでしょうか？

「か、か、か、母ちゃん、こ、この人は？」

「もう、コナタ駄目でしょ。先生にこの人なんて言っちゃ、め」

「いえ、コナタクんのお母さん。そういえばまだ自己紹介していませんでしたので、私のことをコナタクんが知らなくても無理ないですよ」

そんなことを言いながらボクの居る方向に向かって振り向き、しゃがみこんでボクと目を合わせたその人は、ボクの頭をそつとあやすように撫でつつこういった。

「こんばんは。はじめまして、コナタクん。私はアカデミーに幻術の臨時教師として派遣されてきたうちはシスイです。よろしく」

そういつて花が咲き誇るように笑った。

……何この素敵スマイル。惚れてまうやろ。

元オタクなボクとしましては、こんな風に目を合わせてニッコリとかマジ勘弁してほしいんですけど。くそう、相変わらず素敵な乳しやがって……揉んでもかまわないだろうか？

つて……あれ？　なんかシスイつてどつかで聞いたことあるような気がするよな（※コナタはナルトのメインキャラの名前は覚えてますがサブキャラの名前は覚えてません）。あ、思い出したこの前アカデミー内の噂で聞いたうちはイタチの婚約者の名前だ！

前回の人生ではイタチの婚約者についてなんて聞いたことがなかったけど、なんでか今生ではやけに教師の間で有名になってたんだよなあ。アカデミー創立以来の天才も婚約者には甘いらしいとかなんとか。ん？　あれこの子が例の噂のイタチの婚約者ってことはあれか、この巨乳女神ちゃんがひよつとして原作でトビが言ってたイタチが自分で殺したつていう恋人とか？

え？　つまりこんな人類の至宝（※乳のことです）があと3年くらいで失われると？　なんて勿体ないんだ。殺すくらいならボクにくれ！

なんてことをグルグル考えていると、母ちゃんが「そうだ、もう遅いですし、先生、今

夜はうちに泊まっていったらどうかしら？」なんてことを口にした。

なんですと?! 母ちゃんグツジョブ。

「でも」迷惑では……」

「泊まってよ! ボク、先生が泊まっていってくれたら嬉しいなあ」

遠慮がちにそんな風に戸惑うおっぱい女神を前に、ボクは最大限にブリツ子をしてそう言った。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

そんなボクに何を思ったのか、おっぱい女神は数瞬考え込むそぶりを見せた後、そう口にしてフワリと微笑んで泊まることを肯定した。

ふ、ボク大勝利。しかし、改めて見るにイイおっぱいだなあ……ふへへへ。あー、むしろぶりつきてえ。そんなことを思いつつ、ボクは先生に笑って振り向き再びブリツ子全開で言った。

「先生、ボク先生とお風呂入りたくないな!」

そんなことを無邪気を装って抱きついちゃったりしながら言っちゃったよ!

ていうか、おっぱいに限らず柔らかいし良い匂いするんだけど、子供ってマジ役得。抱きついても嫌がられないんだもんなあ。ていうか、本当イイ体してるなあ。一糸纏わぬ姿はさぞかし素晴らしいに違いない……ええのうええのう。ふへへへ、早く見たいな

あ。

ちなみに女神はボクの下心に全く気付いていないのか、一瞬キョトンとした顔を見せたかと思うと、次にヘラツと笑ってボクの頭を撫でながら「いいぞ」と答えた。え、マジですか。駄目もと言ったのにマジでいいの!? やった。てか、キョトンとした顔も可愛いNE。……襲つてもいいデスカ?

そうやって風呂場まで案内するという名目で手を繋いで一緒におっぱい女神とボクは脱衣所に入った。因みに先生の着替えは母ちゃんの使用していない新品の浴衣だ。

ボクはもう臨戦態勢ばっちりさ! といわんばかりにさっさと服を脱いで、「先生早く」といつて無邪気を装って彼女も早く服を脱ぐように急かしながらその時を待った。

やはりボクの下心には気付いていないらしい。おっぱい女神はそんなボクを相手に警戒一つせずに苦笑しつつ服をシウルシウルと脱ぎ始める。

うおお、生ストリップきたー!!

考えてみれば、前世もその前も童貞のまま人生を終えたボクは大人の女の人の生着替えを見る機会はなかった。それがこんなポインポインの可愛い子などボクは今も人生の勝者になった瞬間ではないのか!? と思いつながらドキドキと徐々に生まれたままの姿に向かう彼女を見つめる。

先生はそんなボクの視線の意味に気付くこともなく、服を一枚一枚脱いでいく。ドク

リドクリ、心臓が高鳴る。服の下から現れたその姿、黒いレースのブラジャーに窮屈そうに包まれた白く柔らかそうな溢れんばかりの胸……そうして体の線をあまさず晒したおっぱい女神はマジおっぱい女神でした。なんていうか……イイ……。

あれ？ 意識が遠のく。

「ん？ うわわあ、また鼻血!? ちよ、コナタ、しつかりしろー!」

そんな風に焦る先生の声が聞こえた気がしたのでござる。

* * *

「……はっ!」

そして再び目覚めるとやはりボクはボクの部屋の布団の中でした。

「ふ、夢か」

そうだな、あんな都合のいいこと起こるわけないもんな。そう思っているとガチャリと音がして、見覚えのある女性が部屋に入ってきた。ん!? なんておっぱい女神が此処に。

「良かった、気がついたんだな」

とかほつとした顔をしながら安心したように微笑む姿も可愛いなあ……じゃなくて、

あれ!? 夢じゃなかったの。

「全く、急に倒れるから悪い病気なんじゃないかって心配したぞ。風呂に入る前にのぼせるなんて器用な奴だなあ。とりあえず熱はないようだけど、念のため冷やしておいたから。あれから10分しか経ってないんだ、まだ寝てる。あんだけ血が出たんだ、貧血になつててもおかしくないから」

という言葉からして鼻血出して倒れたの含め現実だったらしい。ていうか、そんなことをいいながらそつと濡れタオルで顔をぬぐってくれたりとか、何この女神、優しい。惚れるぞ、こんにやろう。てか、こんな可愛くて巨乳で甲斐甲斐しくしておっぱいおつきくて優しい婚約者がいるとかイタチマジうらやま……爆発しろ!

いや、やつぱしなくていい。よく考えたらイタチも結構可哀な奴なわけだし。

「じゃあ、私はそろそろ帰るから」

なんですと!?

「先生、帰っちゃヤダ」

そうボクがブリツ子しながらいうと、「もしかして寂しいのか?」と彼女は聞いてきた。それにボクはこくりと頷く。

「じゃあ、少しだけだからな」

そういつて先生は悪戯っぽく笑つてボクの隣に寝転がり、抱き込むようにしてボクの

背をポンポンと撫でて柔らかく微笑んだ。

うおおおー！ 添い寝キター!! ぶは、抱き込まれたことよって直に伝わる胸の感触すげえ! やわらけえ、ねえこれ顔埋めていい!? 埋めて良いよな!? ボクは無邪気な子供がじやれついている風を装って胸の谷間に顔をグリグリ押しつけた。

三度目の正直今度こそ鼻血を吹く無様は回避した! そして実際に胸に顔を埋めた感想……ふおおおお、やわらけええ! 良い匂いする、ヤッペー! き、気持ちよすぎる。天国や、天国はここにあつたんや。そんな風に胸に頭をグリグリするボクを前に、先生は「ん……こら、暴れるなつて」とか子供の悪戯と思つていつてんだけど、何冒頭その鼻に抜ける声、超いろつぺえ。くそ、ボクが6歳でなかつたら、襲つてたのに! そう思うも、先生がそのうち小声で何かの子守歌らしき歌を謡いだしながら、ポンポンと寝かしつけようとリズムとりつつボクの背をたたき出すと、次第に眠気が勝つてボクは眠りに落ちていくのであつた。

そして、朝、ああ良い体験したなあと爽やかに思いつつ、台所に向かつたボクはそれを見た。

「先生、そんなことまでしてもらつてすみません」

「いえ、これも一宿一飯の恩つて奴ですから。あ、コナタくん、おはよう」

そういつて女神は母ちゃんと揃いのエプロン姿で眩しいくらい笑顔と共に振り向

いた。何これ夢の続き？

そしてボクの前へと出されたその女神特製の朝食は見事なまでの和食で、とても美味しゅうございました。

……前言撤回、やっぱイタチ爆発しろ。

終わり。